

# サンタクロースの文化史のための覚え書き<sup>\*i</sup>

フアビオ・ランベツリ

## 序説

ヨーロッパではキリスト教が、それ以前の「異教」やゲルマン系民族の信仰などを完全に破滅させたということが、日本では一般常識になっているようだ。この様子は、日本の宗教史とは著しく異なるが、一神教の排他性によるものとして、欧米の宗教紛争や非寛容の歴史の原因の一つとされている。ところが、このような通説は、欧米と日本との両方の宗教史・文化史に関してはあまりにも無知であることと言わざるを得ない。日本の歴史には頻繁に宗教弾圧があったし、欧米（とりわけヨーロッパ）の歴史には宗教多様性という現象の事例が多かった。小論の目的は、以上のような偏見を打ち破り、より正確な文化理解を促すためには、ヨーロッパにおける宗教習合思想と実

践の一事例を紹介し、その文化史的意義を検討したい。ケーススタディーの対象になるのは、サンタクロースである。周知のとおり、クリスマスの時期の中心的な存在であるサンタクロースは、福音書が語るキリスト降誕の記述とはまったく関係のない人物で、中世の聖人信仰の興隆と同時に現れてきたものであるが、そのクリスマスとの関連性には、キリスト教以前の信仰の残響、またはキリスト教以外の信仰の影響が見られる。

一般的に知られているにもかかわらず、サンタクロースに関する文化史的研究が以外と少ない。これは、おそらく、キリスト教の自己アイデンティティーによるとともに、学問・分野の射程の限界を指摘することでもあると言える。キリスト教の模範的な自己表象は極力、民間信仰や異教的な要素を排除してきた。と同時に、啓蒙主義の伝統を汲む、ヨーロッパ・カトリック文化圏の多くの知識人（民俗学者も含め）は、カトリック教会を批判しながらも、民間信仰も、暗黒の時代の迷信の固まりの残存として無視することができなかつたとしても少なくとも蔑視してきたのである。この意味では——つまり、キリスト教の模範的な自己表象と民間信仰（地域信仰）との習合的思想的な現象を学問の正統な対象から外したヨーロッパの民俗学にとって、日本の神仏習合思想研究の成果が貴重な比較の対象にもなるし、新しいアプローチを促進する欠かせない刺激になると思われる。

ここで、ヨーロッパにおけるサンタクロースの文化史を再検討する前には、まず、クリスマスやサンタクロースの一般的知識をまとめてみたい。

## 一 日本で行われるクリスマスの習慣とサンタクロース

現代のクリスマスを中心になっているのは、祝祭的な雰囲気における、一般的な贈与交換である。子供の場合は、サンタクロースがやってきて、プレゼントをもつてくるという伝承があり、若者や大人の場合は、家族よりも友達といっしょにパーティーや食事をする（特に、ケーキを食べる）習慣があるようだ。このケーキは、主としてチョコレートケーキ、またはイチゴクリームケーキであり、ヨーロッパで食べる伝統的なクリスマスのパンやケーキとは異なる。<sup>\*2</sup> 家の中にクリスマス・ツリーを飾らない家も多いが、全体的なシンボルとして、サンタクロースとクリスマス・ツリー、そして街のイルミネーションがあると言える。

日本では、クリスマスを祝うという習慣が近代に始まり、特に戦後から流行りだしたものである。一八七四年、米国長老教会の宣教師の指導の下、東京・築地湊の第一長老教会で催した「クリスマス祝会」で、初めて「サンタクロース」が登場した。一八九八年、進藤信義が日曜学校の子供向け教材として作成した冊子『さんたくろう』（三太九郎）の扉絵は、ロバを従え、クリスマスツリーを抱えた、ややドイツ風のサンタクロースであった。一九二八年の朝日新聞には「クリスマスは今や日本の年中行事となり、サンタクロースは立派に日本のものに」と書かれるまでになっていた。<sup>\*3</sup>

伝統的には、日本で贈与をもたらす神話的な存在は七福神であるが、彼らは特定の時期に祀られているわけではなく、しかも共同体的（特に、家族的）な意味をもたない。その信仰は江戸期に流行ったが、いまは周縁的なもの

になっている。子供の祭りは伝統的には三月三日、五月五日と年終わりごろの七五三であるが、それらには子供たちを守護する意味合いが強い。また、伝統的には子供にプレゼントが与えられたのは、お正月のときのことだが、その場合、おもちゃよりも服が主要な贈与であった。しかしながら、近代日本にも子供がだんだん新しい文化的な意味をもつようになり、それをあらわす「祭り」が必要になってきた。そこで、外来の祝祭であるクリスマスとそのシンボリズムがその役割を果たすようになった。また、クリスマスの贈与交換は妙に「お歳暮」という日本の習慣との習合ができた。ただし、輸入のシンボリズムであるからこそ、伝統としてまだ確定しない部分が多い。例えば、サンタクロースが家に入る方法（あらかじめ開けておいた窓から）や、プレゼントが置かれる場所（布団のそば、押し入れ）など、家族ごとに差がある。

ここで、いくつかの疑問点が湧いてくる。

- 一 サンタクロースという人物…このおじさんはいったい、だれなのか。
- 二 なぜ、クリスマスのときに、社会のなかで、一般的に贈与交換が行われるのか。
- 三 なぜ、クリスマスのときに、特別なケーキを食べる習慣があるのか。

以上のような問いを解す前には、何点かの留意点に注意しなければならない。

まず、クリスマスが日本の社会に深く浸透してきたのは、おそらく、戦後以降のことであり、戦後のアメリカのクリスマスの行い方の影響があると思われる。したがって、アメリカのクリスマスについて調べる必要があり、結

果として、クリスマスという祝祭は、長い歴史を持ち、古代・中世ヨーロッパに遡る要素があることが分かる。そういう要素も辿る必要がある。

第二の留意点として、キリスト教文化圏では、クリスマスは当然、キリストの降誕を祝うことで、深い宗教的な意味をもつ。クリスマスの本来のキリスト教的な意味は日本ではほとんど無視されている。

最後に、西洋では、クリスマスはもともと家族を中心とする祝祭である。子供が中心的な役割を果たすようになったのは、近世・近代以降のことである。それ以後、サンタクロースは子供にプレゼントをもってくるのだ。しかし、いまは家族でお祝いしパーティーをするのは普通のことである。

## 二 サンタクロースとはだれなのか。

周知のように、現在一般的に親しまれているサンタクロースのイメージは、一九三〇年代にコカ・コーラの宣伝キャンペーンに作られたものである。

### コカ・コーラによるサンタクロースのイメージの横領

一九三一年に、コカ・コーラは新しい宣伝広告のキャンペーンを構想した。その狙いとして、それまで主としてビールなどで販売されていたコカ・コーラという飲み物を、今度スーパーでも売れるようになり、主婦たちにも買ってもらおう、という目的があった。そのために——つまり、主婦に買ってもらったために、子供たちを巻き込む必要が



図1 トーマス・ナストが『ハーパース誌』のカバーのために描いたサンタクロース (Wikipediaより)



図2 ハドン・サンドブロムのサンタクロース (Lagioia 2005より)

あると考えられた。なぜなら、子供はお母さんの消費に影響を与えることが発見されたからだ。したがって、コカ・コーラは子供を魅了させるテーマ・イメージに結びつく必要があった。

この新しい宣伝キャンペーンのデザインを、スウェーデン系のデザイナー Haddon Sundblom (ハドン・サンドブロム) に依頼した。サンドブロムは子供が馴染みのあるものとして、サンタクロースのことを考えた。

サンドブロムはまず、イラストレーターのトーマス・ナスト (Thomas Nast) が一八六二年〜一八八六年のあいだに創造した、サンタクロースの新しいイメージをもとにした。(図1)

その特徴として、北極に住み、いい子供と悪い子供のリストをもち、赤い服を着、おもちゃがいっぱいのお袋を抱えるなどがあげられる。それらをもとに、サンドブロムは自分のお隣さん、営業マンのルー・ペーシエンス (Lou Patience) の顔と体格に着想をえて、新しいサンタクロースを描いた。(図2)

このサンタクロースはものすごい人気を受け、コカ・コーラとの本来の関係が忘れられてしまい、全世界に広まっていった。い

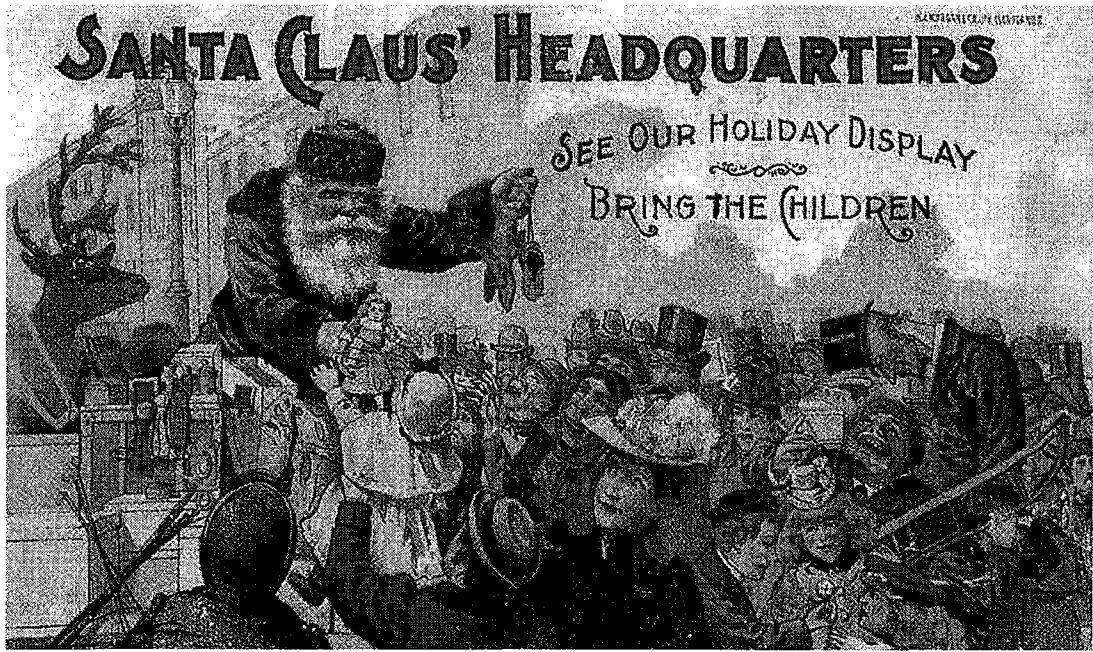


図3 デパートのサンタクロース (Lagioia 2005より)

ま、我々はサンタクロースのことを考えるときに、おそらく、サ  
ンドブロムが初めて描いたすがたが浮かんでくるだろう。

しかし、サンドブロムはサンタクロースに新しいイメージを与  
えたにすぎない。この伝説的な人物は、すでに存在していたのだ。  
しかも、トーマス・ナストが描いたイメージにはサンタクロース  
はすでに商業・消費・繁盛に結びついていた。実は、一八〇〇年  
代後半では、イギリス、フランス、アメリカなどでデパートが初  
めて設立された。これは、新しい消費社会のはじまりでもあった。  
それまでは、サンタクロースが年末の贈与という民俗習慣に結び  
ついたが、今度、彼がもってきてくれるプレゼントは、ますます  
新しく販売される贅沢品（特に、おもちゃや高級菓子類）になっ  
ていく。(図3)そこで、多くの企業・販売社は、宣伝目的に、サンタ  
クロースのイメージを利用することになる。この変質の過程の一  
例として、サンタクロースの住居は、ますますにぎやかで、商品が  
いっぱい揃っているデパートとして見なされるようになった。

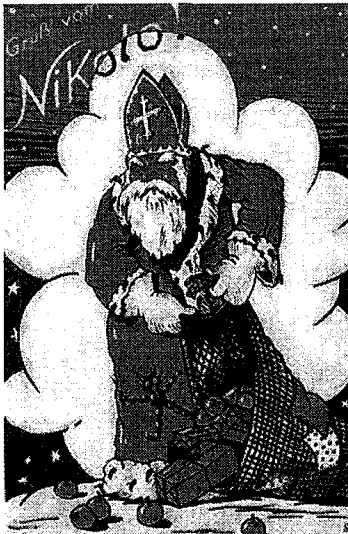


図 4



図 5



図 6



図 7



図 8



図 9



図 10

図 4～10  
近代サンタクロースの原型 (図 6、10はManson 2005より、その他は  
Lagioia 2005より)

これらの図像はすべて、1800年代の末から1900年代の初めごろのクリ  
スマス絵葉書である。



## コカ・コーラ以前のサンタクロース…聖ニコラス

コカ・コーラのキャンペーンに変質し利用される前に、サンタクロースはいったいどのような存在であったのか。この問いを解す手がかりとして、一八〇〇年代の末から一九〇〇年代の初めにかけて作られた絵葉書をいくつか紹介したい。(図4〜10参照)

ここで、サンタクロースの服装、持ち物、乗り物とそれらのシンボリズムに注目したい。

まず、赤い服(暖かそうな赤い布と白い毛皮)と赤い帽子の原型は、もともと、司教の法衣である。白い衣の上に、赤いマント、そして帽子の「司教冠」(ミトラ)があるからだ。しかし、サンタクロースのイメージにもう一つの原型があった。それは、修道士である。しかも、サンタクロースという修道士は、映像資料によって、前近代の獵師(ハンター)に限りなく近いものもある。特にプロテスタントの国では、カトリックの司教のイメージを避けるためには、祝祭的な赤色を保ちつつ、ハンターの格好に近い服装が選ばれた。

サンタクロースの持ち物は、さまざまなおもちゃと植物である。おもちゃは、すでに見たように、一八〇〇年代後半から一般的にサンタクロースのイメージに結びつくようになるが、それ以前の映像資料にはほとんど現れてこない。(ただ、一六〇〇年代の重要な例外がある。これについて後述する)

サンタクロースは、植物と一緒に描かれていることが多い。植物には、モミの木であるクリスマス・ツリーと、古代からヨーロッパで新年のシンボルであるヤドリギがみえる。モミの木については、文献が少なくとも中世まで遡るが、北欧のゲルマン系民族は冬至の季節に、モミの木を伐って家で飾ったという記録が残っている。これがクリスマス・ツリーの起源だったらしい。<sup>\*4</sup>ヨーロッパの他の地域では、一八〇〇年代からこの習慣が普及し始める。

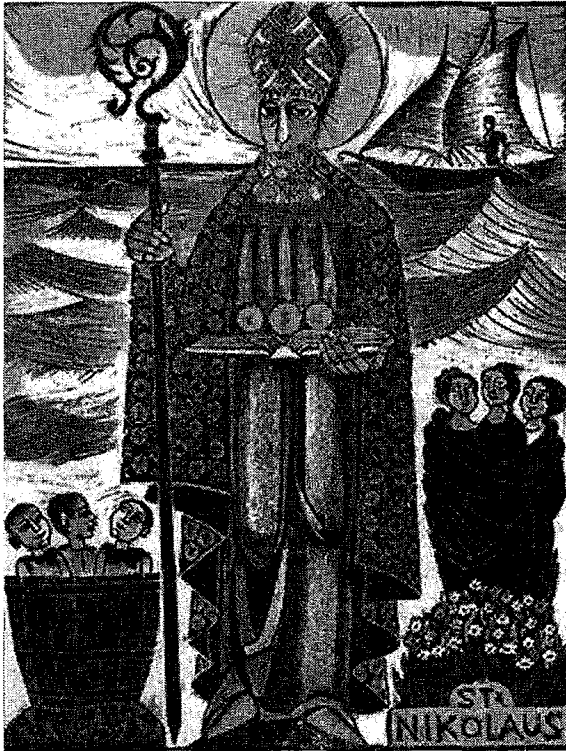


図12 聖ニコラス (Lagioia 2005より)



図11 聖ニコラス (Cioffari 1997より)

他方、ヤドリギは古代ケルト人の聖職者であったドルイドが年末頃に収集した、特別な聖なる意味を持っていた植物であった。地域と時代によって、この季節に他の植物も飾り、さまざまな儀礼的な使用（占いなど）も記録されている。<sup>\*5</sup>

#### 聖ニコラス、ミーラの司教

いずれにしても、サンタクロースの本来の姿は、聖ニコラスという聖人である。（図11―12）

ニコラスの生涯について、不明な点が多い。唯一知られているのは、彼がコンスタンティヌス帝王の時代に（三〇六―三三七）ミーラの司教であった、ということだけである。彼の伝記は五八二年に編成されたが、現存しない。八世紀の初めに書かれた伝記が残存するもつとも古い文献である。その後、一〇世紀の半ばごろに、アイツヒシユテツトのレギノルドは新しい伝記を書いた。<sup>\*6</sup> それはとても有名になり、その結果、北欧にも聖ニコラスの信仰が広まった。



図13 貧者の三娘に持参金を贈与する聖ニコラス (Lagioia 2005より)

普及のプロセスにおいて、そのラテン語の名前 Sanctus Nicolaus はオランダ語の Sinter Klaas<sup>6</sup>、そして最終的には、英語の Santa Claus (サンタクロース) になった。聖ニコラスが多くの奇跡を行ったと言われている。もともと有名で、しかもサンタクロースの民俗史に影響を与えたと考えられる奇跡的なエピソードとして、五つほどあげられる。<sup>\*7</sup>

- 一 貧者の三人の娘に持参金を贈与したこと (図13)
- 二 不正に有罪とされた人々を死刑から救ったこと
- 三 飢饉の時期に、工夫して人々に食料を与えるようにし

たこと

四 ある飲食店の主人が子供三人を殺し塩漬けにしたが、聖ニコラスが彼らを更生させたこと

五 アルテミスの神殿の破壊を実施したこと

瞑想や修行にふける多くの聖人とは違って、聖ニコラスはアクション・マンであった。正義を促し、子供や青少年を守り、困る者に「現世利益」をもたらす役割を果たすと信じられてきた。そのために、よく移動する聖人として見なされ、航海者、巡礼者、漁師、また貧者などを守ると信仰されてきた。さらに、彼の教区にアルテミスとい

う、安産・豊穡の女神の信仰があつたことも忘れてはならない。伝記によつて彼がその神殿を破壊させたにもかかわらず、後述するように、後代の西ヨーロッパでは彼がまさに、アルテミスIIディアナ女神の中世的な変身と深い関わりをもつようになつた。

聖ニコラスは東ヨーロッパのキリスト教・正教では、主要な聖人の一人であり、ロシアの守護聖人になるほど広く信仰の対象にされている。しかし、一〇八七年に、南イタリアにあるバリー市の人々が、ローマ教皇の許可を得て、聖ニコラスの遺骨を盗み、バリーにもつてきた、という歴史的な事件が起こつた。それ以来、聖ニコラスはバリーの守護聖人になり、熱狂的な信仰の対象になつた。いまでも、彼の遺骨はバリーの聖ニコラ大聖堂に安置されており、全世界から巡礼者が彼のお墓を訪れる。珍しいことに、カトリックの教会であるにもかかわらず、聖ニコラスの遺骨が安置されている地下祭室（クリプト）で、正教の儀式が行われている。（図14～18）

### 三 聖ニコラス、サンタクロースおよびクリスマス

バリーでは、聖ニコラスの祭りは五月七日八日に行われるが、聖ニコラスの正式の祭りは十二月六日である。初期キリスト教の時代にはこの日は三週間も続く、十二月二十八日に終わる違反的・越境的な祭りの始まりの日であつた。それは、教会の正式の典礼と平行に、教会でミサの途中で騒ぎやさまざまな侮辱的な行為を行う、小僧たちが開催していた祝祭であつた。彼らは違反的な行いを指導する「子供の司教」を選んだ。この祭りは、古代ローマの中心的な祝祭・サトゥルナリアのキリスト教版であつた。サトゥルナリアはローマ帝国の首都ローマで、十二月十

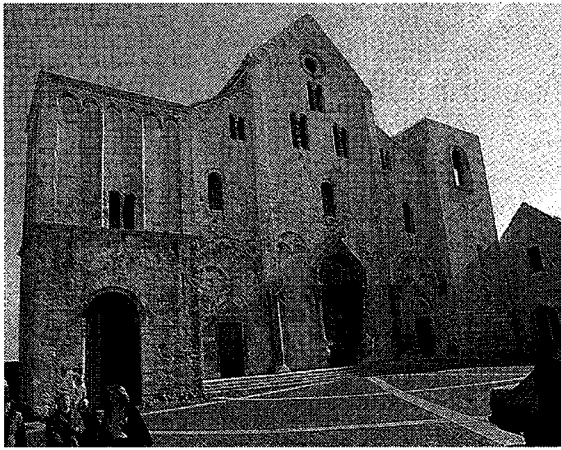


図14 イタリア・バーリ市にある聖ニコラス大聖堂 (Cioffari 1997より)



図16 聖ニコラスの遺骨が安置されている聖ニコラス大聖堂のクリプト (Rambelli Fabio)

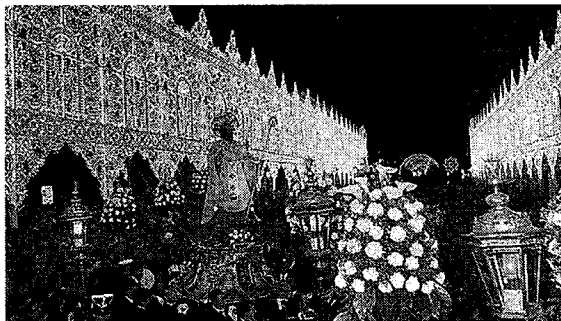


図18 バーリの聖ニコラス大祭の夜行列 (Cioffari 1997より)

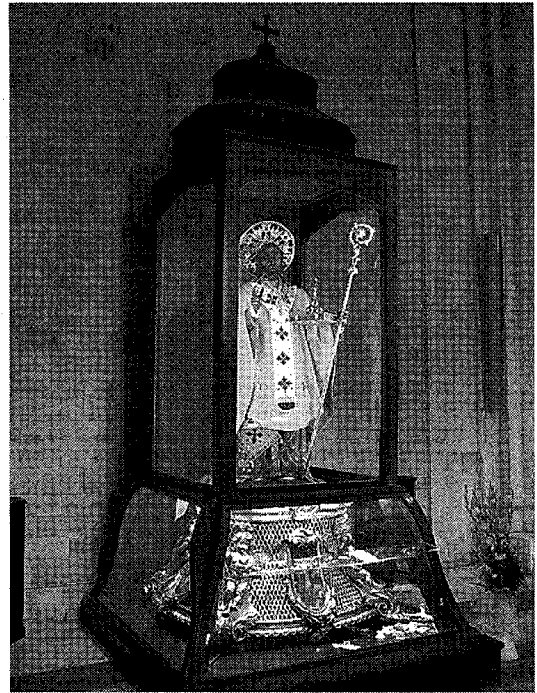


図15 聖ニコラス大聖堂の本尊・聖ニコラス彫像 (Rambelli Fabio)



図17 聖ニコラス大聖堂のクリプトでミサを行うロシア正教の神父 (Cioffari 1997より)

七日から二十三日の  
あいだに行われ、古  
代の神・サトウルヌ  
スの祭りであった。  
サトウルヌスは神話  
的な「黄金の時代」  
を司る根源神であっ  
たので、彼の祭りは  
無秩序という根源的  
な混沌の状態を表象  
して、極端に非日常  
的な時間であった。  
サトウルヌス神祭の  
王という役を演じる  
人が選ばれ、彼のも  
とで騒いだり饗宴を  
したりギャンブルし

たりする、さまざまな逸脱行為が許された。最後の日に、サトゥルヌス神祭の王が象徴的に殺されることよつて祭りが終了した。つまり、神話におけるサトゥルヌス神の殺害を象徴するこの行為は、黄金の時代の終わりと同時にこの一年の終わりということも表象したのだ。黄金の時代という混沌の後、新しい秩序、新しい日常的な一年が始まる、ということの意味した。<sup>\*8</sup>

ここで、ギャンブルは重要な意味をもっていた。古代ローマ人の考え方では、ギャンブルとは占いと近いものであった。なぜなら、ギャンブルでの運は、発然的なことではなく、むしろ神々からの贈与と見なされたからだ。したがって、サトゥルナリアのあいだに占いとギャンブルを行うことは、神々からの贈与を期待する意味をもっていた。

西ローマ帝国の最高精神権威になった教会はサトゥルナリアを禁止したが、あまりにも人気のある祭りであり、何百年のあいだ、なかなかそれを完全に抑圧することができなかった。サトゥルナリアの精神は街から教会のなかに移動して、中世まで続いた。<sup>\*9</sup> したがって、カトリック教会はサトゥルナリアを弾圧する代わりに、その祭りにキリスト教的な意味合いを与えようとした。クリスマスの日そのものがサトゥルナリアの期間中に設定されたのも偶然ではなく、むしろサトゥルナリアをキリスト教的に横領する計画の一環であった。<sup>\*10</sup>

ここで、民間・民俗信仰のレベルで、キリスト教とローマ異教を結ぶ、非常に複雑なシンボルの複合体が現れる。

年末Ⅱサトゥルナリア（サトゥルヌス神の黄金時代のイメージと祭りにおいてのその演出）Ⅱ祝祭Ⅱ饗宴Ⅱ占いⅡギャンブルⅡ神々からの贈与（神からの贈与は、一年の律儀さの報酬と翌年幸運——富み、豊穡など——の約束でもあった）。

いつの間にか聖ニコラスは不思議に、しかも巧妙にサトゥルヌス神のシンボルズムを抱えるようになった。しかし、古代・中世のヨーロッパ人の考え方では、年末に贈与をもたらすのはサトゥルヌス<sup>II</sup>聖ニコラスだけではなかった。

#### 四 サンタクロースと「ワイルド・ハント」

サンタクロースの原型には、ミーラの司教・聖ニコラスの他に、修道士もあつたが、それはもともとハンター（獵師）であつたらしい。そこで、このハンターは中世ヨーロッパの民間信仰の一特徴である、「ワイルド・ハント」（猛烈な狩獵）に結びついていると思われる。ワイルド・ハントというテーマは、ゲルマン系民族の神話からきている。冬至のころ、神々がこの世を訪れ、様々な儀礼が行われたが、中世になると、キリスト教化が進む中で、異教の神の代わりに民族的英雄たちが戦いで亡くなった戦士たちを卒いてこの世に戻ってきて、激しい狩獵を行うと信じられていた。後、煉獄が構想されて以来、ワイルド・ハントの行列が英雄たちではなく、地獄に落ちた罪人の連中として見なされるようになり、そのイメージがますます象徴的になっていく。カーニバルに現れてくることが前からよく指摘されてきたのだが、<sup>註1</sup>サンタクロースやクリスマスにもその影響があることがあまり知られていない。要するに、ワイルド・ハントの変異の一つでは、サンタクロースが異教の神や民俗英雄の役割を果たすようになる。キリスト教への改宗以前、ゲルマン系民族の神話によると、最高神のオーデイン（ヴォータン）が毎年、冬至の時（ユール）に、他の神々と戦没した勇士たちなどを卒いて、この世を訪れ、狩獵を行う。このとき、子供たちが



図19 馬スレイプニルに乗ったオーデイン (Wikipediaより)

オーデインの馬・スレイプニルのために長靴の中に人参、蕈や砂糖を入れて、暖炉の前に置いた。その代わりに、オーデインが長靴をお土産やキャンディーでいっぱいにした。<sup>\*12</sup>この習慣はドイツやオランダに残り、キリスト教への改宗以降、聖ニコラスの信仰と習合された。オーデインの姿は聖ニコラスのそれとよく似ている——特に、修道士・獵師の格好の聖ニコラス。(図19)

ユール(冬至)の祭りは、キリスト教以前のスカンジナビアでも行れた。古代ノルウェー人が、このときに豊穰・多産性の神・フレイルに豚を犠牲とした。この儀礼は、現代のスカンジナビアのクリスマス・ハムという習慣として継続されている。「ユール」とは、クリスマスの古い翻訳でもあり、プロテスタントの布教まで、スカンジナビアではクリスマスの典礼の他に民俗的な祭りが行われていた。また、フレイルの信仰がキリスト教に吸収された。例えば、フランスの聖ブレーズ(祭日…二月三日)が豊穰・多産性の守護聖人として見なされ、その他に、多産性を促す「男根聖人」もあつた。<sup>\*13</sup>スカンジナビアやイギリスでは、聖ステイブン(十二月二十六日)がフレイルのいくつかの特徴を継続していると思われる。

一方、スウェーデンではユールのときには、フレイルの他に、トール神も祭られていた。トールは羊に引張られた乗り物に乗って空を飛ぶと信じられたので、トールの羊がキリストのシンボルとしての羊と習合された。実は、「ユールの羊」(jullbock)と呼ばれたものは、悪霊であつた。ユール＝クリスマスの日に、若者たちが——その一人、「ユールの羊」の格好をして——村の家々を訪れ、土産を頼む習慣があつたが、十九世紀ごろから、ユールの羊が



善良なものになり、子供たちに土産を与える役割を果たすようになった。フィンランドにもこの習慣があった。「ユールの羊」のシンボリズムが中世からフィンランドにも伝来され、ヌーティプッキ (nuuttipukki) と呼ばれた。現在、恐ろしい鬼神としてのヌーティプッキはサンタクロースになった。

要するに、北ヨーロッパでは、聖ニコラスは地中海からやってくるキリスト教の穏やかな姿の他に、ゲルマン系・スカンジナビア系民族の神話の恐ろしい側面も演出するようになった。北欧の長い冬の夜を横断する怪物・悪霊、この世を訪れる神々と死者の行列——この恐ろしい側面が今日のサンタクロースからほど遠いものであるが、近世・近代まではクリスマスの重要な部分であったので、それらについても少し詳しく述べることにしたい。

## 五 サンタクロースの闇の部分

前近代のヨーロッパでは、十月の末から四月の末までの期間は、非常に複雑なシンボリズムを抱えた時期であった。一年の寒い時期にあたり、厳しい寒さによって農耕が不可能であり、個人と共同体の生存が脅かされた。そのため、大昔から、この時期にさまざまな儀礼行為が開催された。それらの儀礼の目的は、共同体の団結とともに、神々に対して冬期間中の擁護と翌年におけるの豊穡を祈ることであった。

この期間中の多くの祭りは、現在、キリスト教的な意味をもつのだが、その深層にはキリスト教以前の信仰や世界観があり、その影響はいまでも残っている。

―十月の末から十一月の半ばまで…ハロウイーン（ケルト人の年末の祭りで、死者がこの世に戻ってきて生者ととも騒ぐ）

―十二月の後半…クリスマスⅡ冬至の祭りⅡサトウルナリア

―正月

―一月六日…キリストの御公現の日

―二月～三月…カーニバル

―三月～四月…イースター（キリストの復活祭）とそれに先立つ齋食の期間

この暗い期間中、様々な超自然的な存在がこの世とあの世とを行き来し、この世に擁護と豊穰をもたらすと信じられていた。これは、ヨーロッパ全土に普及している、キリスト教以前からの、シャーマニズム的な信仰である。

冬の力と潜在的な可能性を具現化したのは、ロシアのデド・モロズ（霜おじいさん）のような人物である。彼はお正月の祝いのときに現れ、<sup>\*14</sup>子供たちに土産を与える。その姿はサンタクロースに似ている。その図像学はドイツ民俗に伝わり、フェーテルヘン・フロスト（小さな霜お父さん）となり、西ヨーロッパのサンタクロースのイメージに影響を与えたという説もある。<sup>\*15</sup>

しかし、ドイツでは、冬はこのような穏やかなイメージだけで表象されたわけではない。ゲルマン系民族の中で広く普及された伝説は、聖人（ときには聖ニコラス）と鬼（場合によって、悪魔、クランプスまたはトロール）について語る。それによると、ある地方に一人の怪物Ⅱ鬼がいた。彼は暖炉の煙突から人の家に入って子供を残酷に

殺した。聖人はその悪鬼を追跡して、捕虜にした。その罪を償うために、心境を改めた鬼が今度それぞれの家にもどって子供たちに土産をもっていく。伝説のバージョンによって、鬼が最終的には地獄に戻るか、それともこの世に残って毎年子供たちに土産をもたらすことになる。バージョンによってよくなった鬼はサンタクロースそのものになる。

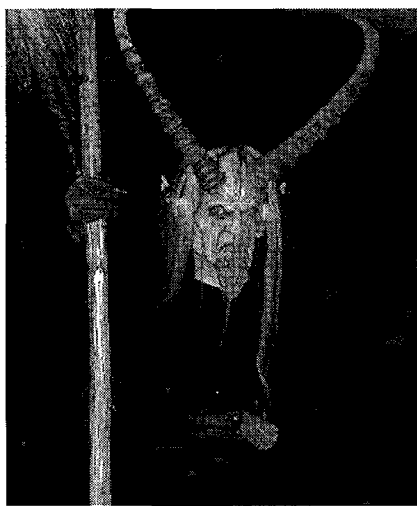


図20 オーストリアのクランパス (Wikipediaより)

ここで、いくつかの重要な要素がある。子供たちを救う聖人が、聖ニコラスの伝記が語る奇跡物語によるもの（あるいは、それに近いもの）だと思われる。また、サンタクロースがもともと悪鬼であった伝説が興味深い。なぜなら、これはおそらく、伝説的な形で、異教の宗教世界のキリスト教化を語ると同時に、民間信仰における冬の両義的なイメージを描くと思われるからだ。暗黒で長い冬が人間を脅かす。特に、子供たちの命がたいへん危ない。しかし、あの世から死をもたらす悪鬼もやってくれば、豊穡や幸せをもたらす神も訪れてくる。この両義性は、実は、サンタクロースの連れに関する伝説でよく表象されている。多くの伝統文化の中で、サンタクロースは恐ろしい者といっしょに行動をするのだ。このサンタクロースの連れは伝統によって名前が異なる。例えば、オーストリアや中欧ではクランパス (Krampus) といふ (図20)、北フランスではペール・フェタル (Père Fouettard)、オランダではツヴァルテ・ピート (Zwarte Piet)、その他の地方ではクネヒト・ルプレヒト (Knecht Ruprecht) と呼ばれる。この連れたちは、棒や鞭と袋を手に持ち、黒っぽいぼろぼろの服を着て、黒い顔と整っていない髪をする。

クネヒト・ルプレヒト（ルプレヒト騎士）はオーストリアのザルツブルクの建設者・聖ルプレヒト（七一〇年死亡）と同一視される。彼に関する伝説によると、クネヒト・ルプレヒトは聖ニコラスの使いであるが、いい子供に土産を与えるが、悪い子供をたたき、また袋に入れて森に捨てたり川に流したりする。オーストリアの克蘭プスは、恐ろしい怪物で、悪魔の伝統的な表象に似ている。

クリスマスの頃、子供たちが黒いぼろぼろの服を着て、恐ろしい仮面をかぶって、鎖を引きずりながら村を激しく走り回っていた。彼らは子供たちを恐れおののかせた。<sup>\*16</sup>この行事は、ワイルド・ハントとハロウィーンと類似しているので、同一の起原をもつと思われる。

フランスの伝統における聖ニコラスの連れ・ペール・フエタール（稲妻お父さん）は、三人の子供を殺したが聖ニコラスに暴かれた。聖ニコラスは子供たちを復活させたが、犯人がその重罪を償うためには、聖人の使いになったといわれている。これは、明らかに聖ニコラスの伝記の奇跡物語を基にしている伝説であるが、その他に、ペール・フエタールはゲルマンの最高神オーディンを思い出させる。稲妻を司り（フエタール）、オーディンの姿に似ているということで、キリスト教以前の信仰と神話と関係していると思われる。

今まで見てきたように、聖ニコラスとその連れというペアは、複数の伝統の混合・習合によることだと考えられるのだが、構造的レベルでは、類似点が多いということで、キリスト教と異教との関係および、キリスト教以前の世界観の両義性を象徴的に表象すると思われる。

## 六 古代の女神たちとサンタクロース

ところが、サンタクロースとクリスマスの文化史には、もう一つ、重要な流れがある。中世までは、あの世から人間に富みなどをもたらす超自然的な贈与者たちは、多くの場合、男性ではなく女性であった。典型的なかたちは、おそらく、ケルト人の女神・エポナ（図21）、ゲルマン人の女神・ペルヒタ、ローマ人の女神・ディアナとギリシャ神話の女神・アルテミス（その神殿が聖ニコラスによって破壊された）<sup>\*17</sup>などであった。

キリスト教はこの女神の信仰を厳しく否定して弾圧したが、完全にそれを消滅させることができなかった。その

結果、主として、二つの新しい展

開があった。一方では、古代の美

しい女神は、ますます姥という醜

い姿で描かれるようになり、魔女

として見なされることがあった

（図22）。他方では、彼女たちの

代わりに男性贈与者が現れてき

た。ここで、聖ニコラス⇨サンタ

クロースがまたかかわってくるの



図21 ケルト人の女神エポナ (Ginzburg 1989より)



図22 ルネサンス期の図版で魔女とされる姥が超自然的な女性に出会う (Ginzburg 1989より)



図23 フランスのペール・ノエル (=ペール・フエタール) (Manson 2005より)  
1900年代初期のフランスのクリスマス絵葉書

だ。ただ、サンタクロースはだいたい、北欧で祀られているのに対して、カトリックの国々では彼はほとんど知られていない。その代わりに、「クリスマスお父さん」(イタリアの Babbo Natale, フランスの Père Noël (図23)、プロテスタント以前のイギリスの Father Christmasなど)、または「クリスマスの男」(ドイツの Weihnachtsmann) という伝説的な人物たちが聖ニコラスの役割を果たしてきた<sup>\*18</sup>。

この人物たちは、呪術的な乗り物(空を飛ぶ動物やほうきなど)に乗って、この世とあの世を行き来し、悪の具現者と闘い、己の共同体を守り、豊穡をもたらそうとしていた。イタリアの歴史学者カルロ・ギンズブルグは、その著書『ペナンダンティ』に、十六世紀のイタリア北東で、このような世界観がまだ生きていたことを描いている<sup>\*19</sup>。

呪術的な乗り物に乗って空を飛び、この世に豊穡をもたらす観念が、現代のサンタクロースのイメージにも生き残っている。

ところが、十六世紀の宗教改革の後、プロテスタントの地域では、聖ニコラスの信仰は弾圧され、禁止された。ただ、この場合もそれを完全に消滅させることができなかった。その代わりに、子供のキリスト自身が十二月二十四日の夜に、贈与をもたらすアイデアが現れてきた。このように、ドイツ語の Christkindel (キリストキンデル



図24 ベファーナ

子供のキリスト) または英語の Kriskringle (クルスクリングル) と呼ばれた子供姿のキリストは、少しずつヨーロッパや北米に浸透していき、いま我々がもつクリスマス イメージの一部を構築してきた。この展開によって、贈与の日は、十二月二十四日の夜に決定されることとなった。聖ニコラス信仰の弾圧は、民間信仰の弾圧の一環でしかなかった。いわゆる「魔女狩り」も、プロテスタントの原理主義的運動が目指した、

キリスト教以前からの信仰、またそれらとキリスト教との出会いから生まれた信仰形態をすべて否定し消滅させる、という目的を実現させる一手段であった。

反宗教改革時代のカトリック圏ヨーロッパでも、民間信仰 (特に新しく定義されたカトリックのドグマに還元されないもの) の弾圧が行われた。しかし、非キリスト教的民間信仰はいまでも生き残っている。

例えば、私が知っている限り、イタリアだけでは、女性贈与者の伝統が残っている。一月五日の夜に家を訪れるといわれている Befana (ベファーナ) はそれである。<sup>\*20</sup> (図24)

その他に、大きい地域の差があるが、十二月三十一日から三月まで、各地に「姥殺し祭り」が行われる。この神話的な「姥」を表象するわら人形がさまざまなかたちで (焼いたり、のこぎりで切ったり、爆発させたりする) 殺される。

ベファーナの祭日は、古代ローマで元旦に行われたヤヌス神とストレニア女神の祭りとの関係があると指摘されてきた。しかし、冬にカカシを焼く習慣は、ヨーロッパの多くの国にある。これは、おそらく古代ケルト人に遡る習慣であると思われる。カカシを焼くとは、古くなったものを破壊することによって新しいものを受け入れる準備

をするという意味もあるだろうし、その他に、女性的豊穡・多産性、富をもたらす女神やスケープゴートのシンボルリズムなどがある。また、「魔女狩り」の残響も認められる。(実は、魔女狩り自体は、近世の民間信仰から離れては理解できない部分もある。) いずれにしても、「姥を焼く」という行為によって豊穡がもたらされる、という根本的な考え方がある。豊穡は多くのかたちで表象される。姥が「殺されて」からの花火や、特に子供たちに配られるキャンディーやドライフルーツなどが典型的なかたちである。実は、ペファーナが両義的な存在である。いい子供には贈与をもたらすが、悪い子供には罰則を与える<sup>\*21</sup>。この意味で、サンタクロースの原型に似ている。先述したように北欧の民俗史では、サンタクロースやそれにあたる贈与者は、必ず「暗い」召使いに同伴されている。サンタクロースはいい子供にプレゼントをあげるのに対して、その連れである「黒い男」(イタリア語の *Jomo Nero*、英語の *Peter the Black*、ドイツ語の *Nichodemus* や *Schwarzer Mann*) はむちをもつて悪い子供に罰則を与える、と信じられていた。ただし、このようにサンタクロースももっていた本来の両義性はいまほとんどなくなった。

この民俗信仰の中のペファーナは、古代の豊穡の女神たちの伝統を継承するとともに、家と共同体の先祖もあらわすのだ。

## 七 サンタクロース、クリスマス、そして子供たち

いままで見てきたように、サンタクロースがクリスマスと関係をもつようになるためには、何百年にわたり複雑な文化プロセスが必要であった。



ローマ帝国の「異教」の信仰体系・習慣（特に祭り）のキリスト教化

サトウルナリアのシンボリズム

冬の両義性、特にその「闇の部分」

超自然的な贈与者たち

聖ニコラスのシンボリズムとの交差

異教とキリスト教の出会いと習合思想の形成

宗教改革とクリスマス（十二月二十五日）の強調

キリスト自身が贈与者になる

民間信仰の弾圧

また、現代の一般人の習慣レベルでは、古代のシンボリズムが次のような形で残っている。

クリスマスは家族や共同体で行われている Ⅱ 共同体団結

贈与交換 Ⅱ 富・豊穡

呪術的な植物（クリスマス・ツリーなど） Ⅱ 生命の樹、富の木

豊穡を象徴する特別な食物・饗宴、お菓子（だいたいドライフルーツ、蜂蜜やスパイス、後にチョコレート）



図25 Jan Steen, 「聖ニコラス祭」(17世紀)(Amsterdam, Rijkmuseum)

古いIIビンゴで遊ぶ習慣

ここで、キリストを通じて子供が初めて新しい役割を果たすことになる。それまでは、子供は特に年末の祭りとは特別な関係をもたなかった。場合によって、死者・先祖である贈与者の役を演じただけである。しかしここで、贈与者が子供を中心に贈与を与えるようになった。

十七世紀から、特に北欧の都会的・ブルジョワ社会では、子供が新しい社会的関心の対象になった。子供の文化的性質もだんだん変わってきた。要するに子供は、死者として見なされる。これによって、ポジティブな価値を付随され、ますます主体性と自律性をもつようになる。これは、クリスマスと子供との関係によく反映されている。サンタクロースとそれに相当する様々な贈与者は、子供たちの社会化(善悪の区別、社会的に認められている態度の育成など)と能動的な決定力(消費)を促す手段になっている。<sup>\*22</sup>(図25)

## おわりに―文化史の眼差し

クリスマスという、今日の日本でもとても馴染みのある習慣は、長い歴史と複雑な意味をもつ。キリスト教とのつながりや、キリスト教以前の、ずっと古代に遡る、ヨーロッパ・地中海に面している諸文化の世界観や信仰の形態の影響が認められる。したがって、今日の世俗化されたサンタクロースの意味を理解するためには、キリスト教またキリスト教以前の様々な信仰の形を理解が前提になっている。ただ、サンタクロースはキリスト教と異教・民間信仰の混合現象だけではなく、有機的な習合思想とその実践から新たに生まれたものだと思われる。つまり、模範的なキリスト教の教えは、様々な形とレベルで多くの民間信仰と関係をもちつつ、新しい信仰とイメージを作りだした。

特に、サンタクロースは死者の象徴であると、クロード・レヴィ・ストロースが主張した。<sup>\*23</sup> 古代からのヨーロッパの民間信仰では、我々一般人にあの世から豊穡をもたらすのは、国家に認定された公式の神々ではなく、むしろ地域の小さな神々であった。これらは、多くの場合、先祖に限りなく近い性質をもっていた。現在、クリスマスが主に家族中心の祝いになっているのも、古代からのこの伝統的思想を継承しているからだと思われる。家族と親友が集まり、団結し、新年に来るべき幸福を期待する。

ところで、産業革命とそれに伴う世界的な資本主義社会の発展によって、伝統的な贈与交換はますますその本来の聖なる意味を失い、単に消費を促すきっかけとして利用されてきた。しかし、消費を促す――つまり、贈与のた



図26 トナカイとサンタクロース

めに過剰に財産を消費することは、サトゥルナリアの本来の精神とはそれほど遠くないかもしれない。なぜなら、過剰に消費することは、神々からの豊穰をもらうきっかけであったからだ。

毎年クリスマス時期に、赤い服を着ているおじさんは、トナカイに引つ張られて空を飛ぶ乗り物に乗って北極あたりから我々のところを訪れ土産を持ってきてくれる。(図26)

これは、一九〇〇年代初期にアメリカで生まれたイメージだが、全世界に広まった。北極、またはスカンジナビアの北部は、北半球でクリスマスの雰囲気を連想させるその雪や自然環境のために特別に選択されたのだろう。

しかしながら、サンタクロースのシンボリズムは遥かに古い。今まで見てきたように、それは古代ローマの宗教と儀礼、キリスト教以前のケルト人、ゲルマン系やスカンジナビア系の民族の信仰、キリスト教の聖人信仰などという、多くの文化的動向の絡み合いから生まれた。サンタクロースの根底には、冬——特に冬至——に関する古代からのシンボリズムが認められる。冬至は冬(一年のもっとも厳しく危険な季節)の始まりでもあれば、天文学的には新年の始まりでもある。したがって、その危ない時期に、古代ヨーロッパの人々は危険からの保護と同時に、富や幸せを祈願していた。そこで、贈与交換が新年における豊穰や富への希望とともに、危機的な時期に共同体や家族の連帯感を強化を意味していた。この場合、「悪者」の刑罰というテーマは、一部の人々を共同体から排除するということで連帯感の強化装置でもあったのだろう。

冬至の時期に、神々、神話的英雄や先祖たちが人間の領域を訪れ、お供え物の代わりに様々な土産をもってきた。

キリスト教がこの複雑なシンボルイズムを横領し、それをキリストの降誕と習合させた。新年における幸運と富（現世利益）のテーマはキリスト教的な終末論・救済論（あの世における永遠の幸せ）と結びついた。救世者キリストがあゝの世からの使者の役を演じる。また、カルロ・ギンズブルグが描いた共同体を守る神秘的な力と共同体を脅かす悪の力との闘いが、キリストとサタン、つまり善と悪との闘いと再解釈された。このように、キリスト教以前の伝統的なメタヒストリーに、別のメタヒストリーが重なることによって、前者がより豊かになる。それによって民間信仰のメタヒストリーは、地域範囲を超えることができ、「普遍的」になっていく。現世利益が救済論を有し、倫理的な要素を強めるようになる。それと同時に——しかも、重要なことで——キリスト教も、異教の文化基盤を受け入れることにより、深く文化に根をおろし、「在地信仰」になる。キリスト教を「外来宗教」として見なすヨーロッパ人がいないのは、偶然ではない。なぜなら、異教の在地信仰を吸収することによってキリスト教がまさにヨーロッパの在地信仰になったからだ。したがって、サンタクローアのシンボルイズムの中で、真のキリスト教的なものとそうでないものを区別することが困難である。この意味で、サンタクローアとクリスマスはシンクレティズム（宗教混淆）ではない。なぜなら、多くの要素が有機的に融合し新しい文化的単位を形成した。なので、サンタクローアはシンクレティズムではなく、むしろみごとに成功した文化変容の一事例といえるかもしれない。この文化変容（異教とキリスト教の習合）により、ヨーロッパ文化の民俗史的な基礎が生まれた。

## 註

- \* 1 本稿は、平成17年度札幌大学留学研修制度による研究成果の一部である。本稿を書くにあたって、Eraldo Baldini 氏、菅本康之氏、Athanasios Drakakis 氏に深く感謝したい。
- \* 2 ヨーロッパ各地で、クリスマス時期に食べられているパン・ケーキ類にはほとんど、ドライフルーツやスパイスが含まれている。
- \* 3 Wikipedia Japan, 「サンタクロース」による。
- \* 4 クリスマスツリーはおそらく、「富の木」(＝宝棒、伊語「albero della cuccagna」(豊穰、富、逸楽)というテーマに結びついていると思われる。これについて、Cocchiara 1980 参照。
- \* 5 これについて、Cattabiani 1994、2003、または Baldini 1989、2003 参照。
- \* 6 Cioffari 1997 参照。
- \* 7 詳しくは Cioffari 1997 参照。
- \* 8 Cattabiani 1994、2003 参照。
- \* 9 サトゥルナリアのもう一つの、後の現れとして、カーニバルがあると思われる。カーニバルと中世ヨーロッパの民俗信仰の新しい研究動向の一例として、Lombard-Jourdan 2005 参照。
- \* 10 サトゥルナリアもクリスマスも冬至の祭りであり、新年における幸福を祈る目的を持つ。
- \* 11 ワイルド・ハントについて、Schmit 1995、2000、また Baldini e Trevisan (a cura di) 2005 (Ravenna) Lombard-Jourdan 2005 参照。
- \* 12 Sieker 1999、pp. 171-173 参照。(Wikipedia による)
- \* 13 これについて、Berger 1985、pp. 81-84、105-112 参照。(Wikipedia による)
- \* 14 正教の伝統では、サンタクロースにあたる人物は、聖バジリウスであり、子供たちを訪れるのはクリスマスではなく、大晦日の夜である。
- \* 15 Wikipedia による。
- \* 16 Müller und Müller 1999 ([http://www.fmueller.net/krampus\\_de.html](http://www.fmueller.net/krampus_de.html)) 参照。(Wikipedia による)

- \* 17 Ginzburg 1686。
- \* 18 その他の地域の例としてギリシャでは、年末に贈与をもたらすのは、12月31日の夜の聖バジリウスである。
- \* 19 Ginzburg 1674。
- \* 20 ベファアーナの祭りが今日までイタリア人の強い習慣になっているのは、おそらく戦前のファッショ政権の文化政策にもよることだと思われる。なぜなら、当時のイタリア文化の「ローマ化」政策の一環として、ベファアーナの日には子供に土産を与えることがファッショによって強く促進されたからだ。
- \* 21 ベファアーナと魔女との関係が明らかである。共同体のシャーマンとして努める姥・ベファアーナが両義的存在であったため、非キリスト教民間信仰の弾圧運動の中で激しい攻撃を受けた。
- \* 22 Manson 2005。
- \* 23 Lévi-Strauss 1665。

\* 参考文献

- Baldini, Eraldo. 1986. *Alle radici del folklore romagnolo*. Ravenna : Longo.
- . 1988. *Paura e "maraviglia" in Romagna. Il prodigioso, il soprannaturale, il magico tra cultura dotta e cultura popolare*. Ravenna : Longo.
- . 2003. *La sacra tavola*. Bologna : Edizioni Pendragon.
- . 2006. *Halloween*. Torino : Einaudi.
- Baldini, Eraldo e Sara Trevisan, a cura di. 2005. *Ravenna e i suoi fantasmi*. Ravenna : Longo.
- Berger, Pamela. 1985. *The Goddess Obscured : Transformation of the Great Protectress from Goddess to Saint*. Boston : Beacon Press.
- Buttitta, Antonino. 1995. "Ritorno dei morti e rifondazione della vita", in Lévi-Strauss 1995 : 7-42.
- Cattabiani, Alfredo. 1994. *Lunario*. Milano : Mondadori.

- . 2003. *Calendario*. Milano : Mondadori.
- Cioffari, Gerardo. 1997. *San Nicola di Bari*. Cinisello Balsamo (Milano) : Edizioni San Paolo.
- Cocchiara, Giuseppe. 1980. *Il paese di cuccagna e altri studi di folklore*. Torino : Bollati Boringhieri.
- Ginzburg, Carlo. 1974. *I Benandanti*. Torino : Einaudi. (カルロ・ギンズブルグ著『夜の合戦：16—17世紀の魔術と農耕信仰』東京、みすず書房、1989、または『ベナندانティ：16—17世紀における魔術崇拜と農耕儀礼』東京、せりか書房)
- . 1989. *Storia notturna*. Torino : Einaudi. (『闇の歴史：サバトの解説』東京、せりか書房、1992)
- Isambert, François-André. 1982. *Le sensse du sacré : Fête et religion populaire*. Paris : Minuit.
- 葛野浩昭、1998。『サンタクロースの大旅行』東京、岩波新書
- クラウス・クラント、克美・タテノクラント、1999。『クリスマスードゥやって日本に定着したか』東京、角川書店
- Lagioia, Nicola. 2005. *Babbo Natale*. Roma : Fazi Editore.
- Lévi-Strauss, Claude. 1995. *Babbo Natale giustiziato*. Palermo : Sellerio. (『サンタクロースの秘密』東京、せりか書房、1999)
- Lombard-Jourdan, Anne. 2005. *Aux origins de carnaval*. Paris : Odile Jacob.
- Manson, Michel. 2005. *Histoire(s) des jouets de Noël*. Paris : Téraèdre.
- Müller, Felix, und Müller, Ulrich. 1999. "Percht und Krampus, Kramperl und Schiach-Perchten". In Ulrich Müller und Werner Wunderlich (Hrsg.), *Mittelalter-Mythen 2: Dämonen, Monster, Fabelwesen*. St. Gallen (Switzerland), 1999, pp. 449-460.
- Nissenbaum, Stephen. 1996. *The Battle for Christmas*. New York : Knopf.
- Schmitt, Jean-Claude. 1995. *Spiriti e fantasmi nella società medievale*. Roma and Bari : Laterza.
- . 2000. *Religione, folklore e società nell'Occidente medievale*. Roma and Bari : Laterza.
- . 2004. *Medioevo "superstizioso"*. Roma and Bari : Laterza. (シヤン＝クロール・ハチメント『中世の迷信』東京、



白水社(1998)

Siefker, Phyllis. 1996. *Santa Claus, Last of the Wild Men : The Origins and Evolution of Saint Nicholas, Spanning 50,000 Years*. Jefferson, N.C. : McFarland.

若林ひとみ、2004。『クリスマスの文化史』東京、白水社